

日本英文学会中部支部
第66回大会プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

日時：2014年10月18日(土)

会場：中京大学名古屋キャンパス

(〒466-8660 名古屋市昭和区八事本町101-2)

日本英文学会中部支部事務局

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院文学研究科 英米文学研究室内

E-mail: chubu@elsj.org

HP: <http://www.elsj.org/chubu/>

中京大学名古屋キャンパスまでの交通案内

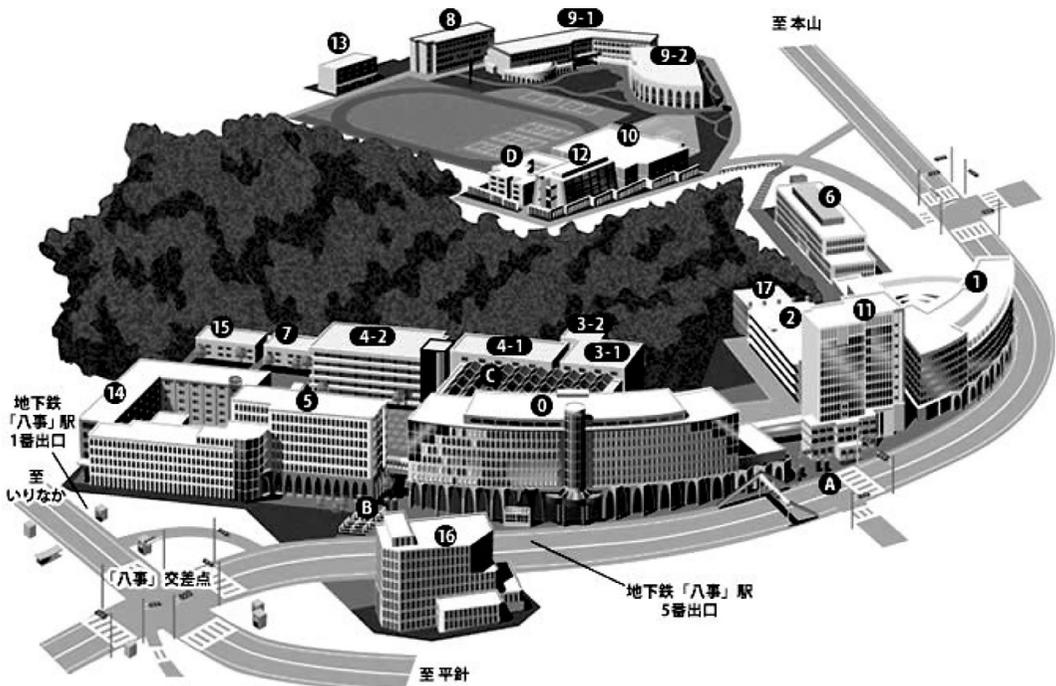
交通アクセス

名古屋駅から名古屋市営地下鉄東山線に乘車、伏見駅で鶴舞線に乗り換え、八事駅下車
八事駅5番出口を出て本山方面へ直進、会場の1号館まで徒歩3分

キャンパスマップ

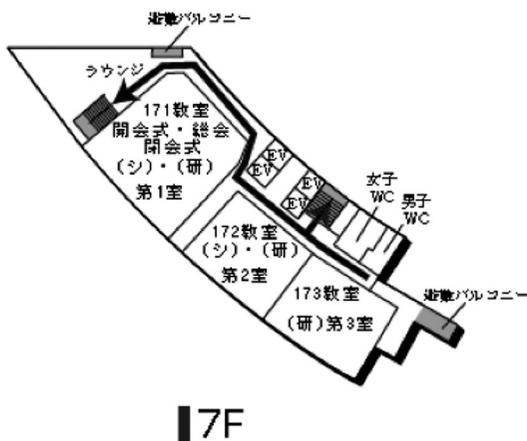
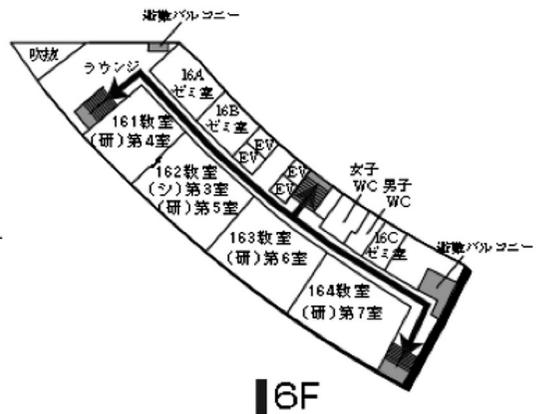
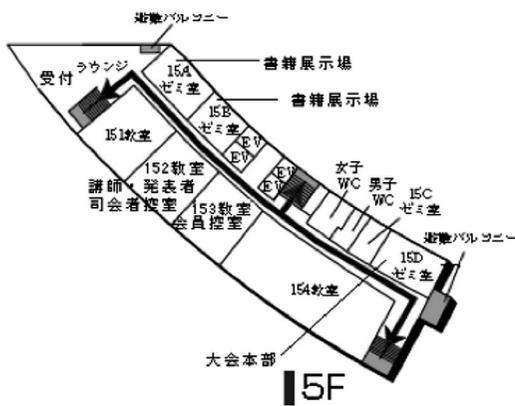
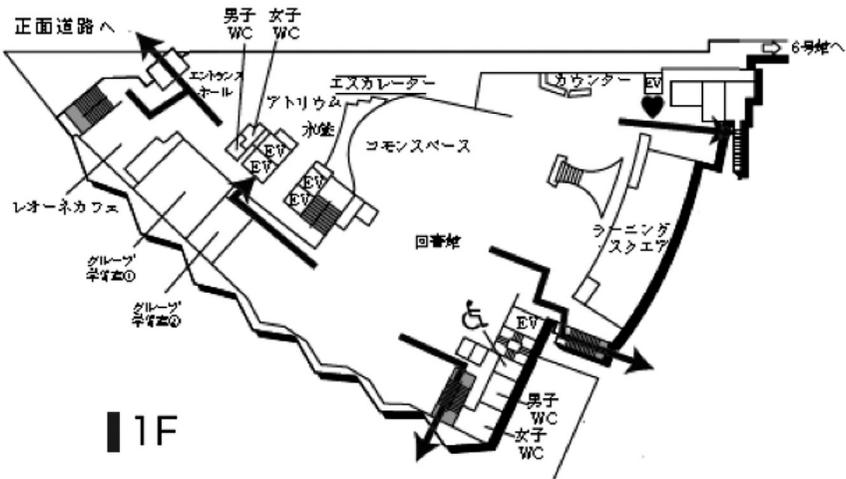
会場はおもに1号館になります。

懇親会は0号館(センタービル)で行います。



- | | | |
|---------------------|------------------|---------------------------------------|
| ① センタービル(0号館) | ⑦ 7号館(教室棟) | ⑭ 14号館(研究棟/文・国際英語
国際教養・総合政策・経済・経営) |
| ② 図書館・学術棟(1号館) | ⑧ 8号館(教室棟) | ⑮ 15号館(会議棟) |
| ③ 2号館(教室棟) | ⑨-1 9号館(研究棟/法学部) | ⑯ アネックス(16号館) |
| ③-1 3号館(教室棟) | ⑨-2 9号館(教室棟) | ⑰ 工学部実験棟(17号館) |
| ③-2 3号館別館(研究棟/心理学部) | ⑩ 10号館(体育館) | A 正門 |
| ④-1 4号館中館(教室棟) | ⑪ 11号館(本部棟) | B 西門 |
| ④-2 4号館西館(教室棟) | ⑫ 12号館(体育館) | C ガレリア |
| ⑤ 5号館(教室棟) | ⑬ 13号館 | D クラブハウス |
| ⑥ 6号館(研究棟/工学部) | | |

教室案内 (1号館)



受付 (理事選挙投票所) : 5階ラウンジ
 開会式・総会・閉会式 : 171教室
 シンポジウム : 171教室、172教室、162教室
 研究発表 : 171-3教室、161-4教室
 講師・発表者・司会者控室 : 152教室
 会員控室 : 153教室
 書籍展示場 : 15A、15Bゼミ室
 理事会、大会本部 : 15Dゼミ室

開催校からのお知らせ

【ご入構について】

来客用の駐車場がありませんので、自動車でのご来校はご遠慮いただき、公共交通機関をご利用ください。

【食事場所について】

大学内の食堂については、0号館（センタービル）2階「プレジール」が14時まで営業を予定しております（臨時休業等の場合もあります）。また、八事交差点周辺の飲食店もご利用いただけます。

【周辺のコンビニ情報など】

生協購買部が14時まで営業を予定しております。また、八事交差点周辺には、コンビニエンスストアやショッピングモール（フードコート有）等もございます。

自動販売機は1号館1階と2階、2号館1階にございます。

【開催校からのお願い】

当日は1号館を含む周辺の校舎において、入学試験等の行事が予定されております。ご高配の程、お願い申し上げます。

日本英文学会中部支部第66回大会プログラム

日時：2014年10月18日(土)

場所：中京大学名古屋キャンパス(名古屋市昭和区八事本町101-2)

大会受付 12:20より (1号館5階ラウンジ)

開会式 12:50～13:00 (1号館171教室)

開会の辞 日本英文学会中部支部長 松本 三枝子

開催校挨拶 中京大学国際教養学部教授 酒井 正志

総会 13:00～13:30 (1号館171教室)

シンポジウム 13:40～15:50

第1室(アメリカ文学) 1号館171教室

「^{ミト}路と異界のアメリカ——ロード・ナラティヴと他者」

森 有礼、杉野 健太郎、小原 文衛、塚田 幸光

第2室(英語圏文学) 1号館172教室

「インドを遠く離れて——近現代英語圏文学における幻想のインド」

内田 勝、角田 信恵、加瀬 佳代子

第3室(英語学) 1号館162教室

「英語の史的変化と言語のタイプ」

三上 傑、島田 雅晴、山村 崇斗

研究発表 第1発表 16:00～16:25 第2発表 16:30～16:55

第3発表 17:00～17:25 第4発表 17:30～17:55

第1室 1号館171教室(英米文学) 16:00～17:25

第2室 1号館172教室(英米文学) 16:00～17:25

第3室 1号館173教室(英米文学) 16:00～17:25

第4室 1号館161教室(英語学) 16:00～16:55

第5室 1号館162教室(英語学) 16:00～17:55

第6室 1号館163教室(英語学) 16:00～17:25

第7室 1号館164教室(英語学) 16:00～17:55

(理事選挙：17:00終了)

閉会式 18:00～18:10 (1号館171教室)

閉会の辞 日本英文学会中部副支部長 鈴木 達也

懇親会 18:30～20:00 (0号館(センタービル)2階)

カフェテリア・プレジール(会費4000円)

研究発表一覧

第1室(英米文学) 1号館171教室

司会 榎本 洋(愛知県立大学准教授)

- 『大いなる遺産』における成功と尊厳の描出
武藤 美代子(金城学院大学非常勤講師)
- ディケンズの『イエスの生涯』: ディケンズの天国獲得のストラテジー
楚輪 松人(金城学院大学教授)

司会 鈴木 実佳(静岡大学教授)

- 女主人公の自立: 『ジェイン・エア』と『ヴィレット』における逆転の構造
若杉 真綾(愛知淑徳大学大学院生)

第2室(英米文学) 1号館172教室

司会 石川 隆士(琉球大学教授)

- チェンバレン発言「悪夢」の意味: ハーンの人生の再検討
中井 孝子(名古屋大学大学院生)
- 東の国の人気者——J. M. Synge 作品の日本上演記録から読み取れること
片岡 由美子(愛知県立大学准教授)

司会 上原 早苗(名古屋大学教授)

- The Picture of Dorian Gray* における阿片とオリエント
CHEN Lu(名古屋大学大学院生)

第3室(英米文学) 1号館173教室

司会 恒川 正巳(富山大学教授)

- Talbotの払った代価: 物悲しい結末——*A Sea Trilogy*の一考察
高橋 公雄(愛知学院大学大学院生)

司会 梅垣 昌子(名古屋外国語大学教授)

- 攪乱する象徴——Saul Bellowの“Looking for Mr. Green”を読む
岡崎 浩(日本福祉大学准教授)
- 「我が心の君」: フォークナーのエコロジー、アナクロニズム、そして少女表象
森 有礼(中京大学教授)

第4室(英語学) 1号館161教室

司会 服部 義弘(静岡大学名誉教授)

- 動詞preventのV-ing形を伴う補文の歴史的発達について
中川 聡(豊田工業高等専門学校准教授)
- ME/i:/ と ME/ji/ の融合について
平郡 秀信(中京大学教授)

第5室(英語学) 1号館162教室

司会 松元 洋介(中京大学講師)

- 後置修飾の過去分詞を含む名詞句の統語構造について
チゴチ(名古屋大学大学院生)
- 文主語構文と外置構文の派生について
近藤 亮一(名古屋大学大学院生)

司会 中川 直志(中京大学准教授)

- 英語における否定倒置構文に対する極小主義的アプローチ
小池 晃次(名古屋大学大学院生)
- Tough構文に於ける再構築と意味・音韻表示の再統合
前澤 大樹(名古屋大学博士研究員)

第6室(英語学) 1号館163教室

司会 守屋 哲治(金沢大学教授)

- 日英比較による使役動詞Haveの意味解釈に関する一考察
藤原 隆史(信州大学大学院生)
- No more A than B構文の認知意味論——クジラ構文の意味と認知
廣田 篤(金沢大学大学院生)
- 付加疑問文の極性について——間主観性と認知文法の視点から
中谷 博美(金沢大学大学院生)

第7室(英語学) 1号館164教室

司会 石崎 保明(南山大学短期大学部准教授)

- 英語と日本語における被動作主焦点化の認知プロセスについて
高島 彬(金沢大学大学院生)
- 認知言語学におけるプロファイル(profile)の概念に関する一考察——指示代名詞thisとthatを例にして
小林 隆(金沢大学大学院生)

司会 都築 雅子(中京大学教授)

- 英語と日本語の語りをグラウンディングの観点から考える
向井 理恵(金沢大学大学院生)
- 道具・手段のデに対応する英語表現
加藤 鉦三(信州大学教授)
Sean Mehmet(信州大学准教授)

シンポジウム・要旨

第1室(アメリカ文学) 1号館171教室

路と異界のアメリカ——ロード・ナラティヴと他者

司会・講師	中京大学教授	森 有 礼
講師	信州大学教授	杉 野 健太郎
講師	金沢大学准教授	小 原 文 衛
講師	関西学院大学教授	塚 田 幸 光

アメリカ文学が旅の文学であることはこれまでも指摘されてきた。新大陸の発見は、それに続く探検と植民、開拓と発展の歴史とともに、常に放浪や逃亡の、そして排除と抑圧の物語をも生み出してきた。それ故その旅の道程は必ずしも明るい未来へと続くものではなく、むしろ必然的に陰鬱な異界との遭遇やその暴露の過程であったことは、改めて強調しておく必要があるだろう。

本シンポジウムは、ロード・ナラティヴ／ロード・ムーヴィーを手掛かりとして、アメリカの異界について考察することを目的とする。取り扱う時代はほぼアメリカン・ニューシネマ以降に限定されるが、これは映画という表現技法がアメリカの暗部に目を向けた時期と無縁ではない。講師4名の発題を通じて、アメリカの(旅)路とはその「他者」との出会いのトポスであることを確認したい。

(文責：森 有礼)

Easy Rider とユートピアニズム——ロード、異世界、他者、そして対立の創生

杉 野 健太郎

映画 *Easy Rider* (1969、日本公開1970、Dennis Hopper監督)ほど世の中に衝撃を与えた映画はそう多くはないでしょう。当時流行のオートバイ映画群を大きく超えてロード・ムーヴィーとなることによって、いくつもの異世界と他者を観客に提示する *Easy Rider*。二人組は、時計を捨てることによって現代の資本主義的管理社会であるLAを逃れ、カトリックの農家、ヒッピー・コミュニオン、ルイジアナの固陋な男性集団、そしてLSDによるサイケデリック世界という、ユートピアとディストピアを経験します。『イーger・ライダー』は、他者や異世界と遭遇するロード・ムーヴィーであり、アメリカにとってまったく見たくないリアルを提示し観客に非快楽をもたらします。さらには、対立の創生を刻印した映画であり、それまでのドメスティックな映画と異なり、実験映画に加えて外国映画という異スタイル映画と遭遇する映画であることをお話しします。

『悪魔のいけにえ』を観るフォークナー——都市伝説とロード・ナラティヴ

森 有 礼

ホラー映画『悪魔のいけにえ』(*The Texas Chain Saw Massacre* 1974)をロード・ムーヴィーの系譜に位置付けるのは些か突飛かも知れない。だが車の旅から恐怖の館に迷い込む犠牲者の若者達の末路は、路上が他者の棲む異界との邂逅の場であることを示唆している。翻ってウィリアム・フォークナーの『サンクチュアリ』(*Sanctuary* 1931)に登場するカップルも、田舎道での自動車事故を契機に『悪

魔のいけにえ』とほぼ同じ破滅的な運命に陥る。恰もフォークナーが本作を予め観ていたと言わんばかりに、両作品の状況は酷似している。

本論の目的は、『サンクチュアリ』を、『悪魔のいけにえ』に代表される類のアメリカの都市伝説と関連付けながらロード・ナラティヴとして読むことである。異界としての家、そして他者との不可避的な出会いの場としての路の意味を確認することで、アメリカのロード・ナラティヴが言わば欲望の「現実界」を照射する説話形式であることを述べたい。

ランボー、トラウマ、反復強迫——逃走のロード・ナラティヴ

小原文衛

First Blood (1982) の主人公ランボーによる逃走の物語は、ベトナム戦争というトラウマを巡る一つの物語である。同時にこの物語はトラウマを巡る反復強迫のあり方をほぼ幾何学的に提示しており、ここからベトナム帰還兵映画に内在する一つのテンプレートを抽出することも可能である。トラウマ的なものは逃避不可能であり、どのような逃走の軌跡を辿っても再び遭遇せざるを得ない、一種の神託物語のような構造。この構造に注目すると、ランボーはエディプスの正当な継承者だという想定も可能になる。この構造の考察を土台として、*Vanishing Point* (1971) や *Welcome Home, Soldier Boys* (1972) のニューシネマ的なロード・ナラティヴから *First Blood* にいたる、トラウマを巡る語りの転回を辿り、反復とトラウマ、反復と知の関係性についての理解をさらに深めたい。

イメージの異境——フレーム、ロード、『パリ、テキサス』

塚田幸光

「ロード・ムービーとは戦後の現象である」。ティモシー・コリガンが看破したのは、二つの「戦後」と「ロード」のトラウマティックな関係に他ならない。それは『危険な場所』(1951) や『黒い罌』(1958) に顕著なノワール的迷走であり、『イージー・ライダー』(1969) や『バニシング・ポイント』(1971) が暗示するヴェトナム／ニューシネマ時代の疾走だろう。それらは「死」へのドライブであり、同時代のナイトメアではなかったか。ならばアメリカン・ロードとは、負のイメージでしかないのだろうか。

本発表では、ヴェンダース『パリ、テキサス』(1984) に焦点を当て、ロード・ムービーの変容を考察する。トラウマ的ロードから、家族再生のトポスへ。或いは、何処にもないアメリカから、アメリカン・ポートレートへ。1980年代に変化する「ロード」表象を軸に、『パリ、テキサス』が隠蔽／開示する複層的イメージ／フレームを考察する。

第2室(英語圏文学) 1号館172教室

インドを遠く離れて——近現代英語圏文学における幻想のインド

司会・講師	岐阜大学教授	内田 勝
講師	岐阜聖徳学園大学教授	角田 信恵
講師	金城学院大学准教授	加瀬 佳代子

それぞれ18世紀、19世紀、21世紀に書かれた3編の文学作品を取り上げ、英語圏作家たちの想像力の中で、幻想のインドがどのような役割を果たしてきたのかを考えてみたい。ここで扱う作家は、かつてEve Kosofsky Sedgwickの*Between Men* (1985)において「赤ん坊の顔をした帝国主義」の作家と評されたLaurence Sterne、文字通り典型的な帝国主義作家としての活動を行なったRudyard Kipling、そしてグローバル化する世界を生きる現代のカナダ人作家Yann Martelの3人である。彼らの想像力の中で表象され、語られ、騙られたインドは、感受性豊かな智者たちが集う地として、あるいは馴化されるべき動物／原住民たちが住まうジャングルとして、あるいは現代人が回復すべき精神性の拠点として立ち現れる。そうした表象の作られ方に、何らかの一貫性を見出すことはできるだろうか。

“The story with Bramins is the better story.”

——ローレンス・スターンの捏造恋日記とインドの役割

内田 勝

Laurence Sterneがその死の前年に書いた*Continuation of the Bramine's Journal* (1767執筆)は、若い人妻Eliza Draperに宛てた道ならぬ恋の日記である。インドで生まれ育ったイライザにちなみ、日記の中では男性バラモン(Bramin)と女性バラモン(Bramine)との熱い恋が描かれる。しかし現実のイライザはスターンに恋愛感情など持っていなかった。スターンは自ら捏造した恋の妄想に浸っただけである。現実よりも妄想を選んだスターンは、現代カナダの小説*Life of Pi* (2001)の鍵となる章句“The story with animals is the better story.”をもじって言えば、「バラモンの出てくる物語のほうがいい」という態度を取ったのだ。スターンの妄想に果たした幻想のインドの役割を、時代背景に則して考えてみたい。

ジャングルと村のはざままで：キプリングのマウグリ物語群における貴種流離譚の破綻

角田 信恵

Rudyard Kiplingの*The Jungle Book* (1894)および*The Second Jungle Book* (1895)に収録された計8篇のマウグリ(Mowgli)物語群は、キプリングの作品のなかでもっとも広く読まれてきている。狼の一家に育てられた人間の赤ん坊＝マウグリが、人間であるがゆえにジャングルの獣の世界を統御する支配者の位置に立つ。こうした物語は植民地を舞台にした植民者の活躍の物語と重なり合い、そこには植民地支配のアレゴリーが容易に読みとれるのである。

だが、ジャングルがインドを表す代表的なメタファーであったことからすれば、植民者たるマウグリは人間の世界に帰らなくてはならないはずだ。すなわち、この物語群は貴種流離譚をなさねばならないはずだ。とすれば、この物語群はなぜ貴種流離譚の成立を微妙なかたちで拒んでいるのか。そんなところから話をはじめ、キプリングがなにを意識下に追いやって、帝国主義の作家として

知られるようになったのかを考えてみたい。

グローバル化する世界とインドの役割：Life of Piにおける信仰と非暴力と騙り

加 瀬 佳代子

19世紀、インドは「精神性のパラダイム」となった。それ以来、インドを精神性担当とする国際分業は継続中であるといえる。では、グローバル化が進行する今、その「精神性のパラダイム」はどのように刷新されているのか。Yann Martel, *Life of Pi* (2001) を通して見てみたい。

作者は、この小説を「神を信じたい物語」として開始すると、その物語をヒンドゥー教、キリスト教、イスラム教を同時に信仰するインド人Piに語らせる。そして、このPiの宗教的越境を支えるのがM. K. ガンディーだ。しかし物語の後半、非常事態下のPiに非暴力と暴力の折り合いをつけるという課題が押し付けられる時、ガンディーの非暴力の限界が示されることになる。ガンディーはアイコンにすぎないというわけだ。そこで作者は、非暴力に代わる手段として、「想像力」と「語り／騙り」という新たな手段をPiに提示させる。

第3室(英語学) 1号館162教室

英語の史的变化と言語のタイプ

司会・講師	中京大学講師	三 上 傑
講師	筑波大学准教授	島 田 雅 晴
講師	筑波大学助教	山 村 崇 斗

Chomsky (1981) による原理とパラメータ・アプローチにおいて、自然言語はすべての言語に共通する原理と言語間で変異するパラメータから構成される。この枠組みでの比較統語論研究により、現在まで理論的・経験的に重要な多くの貢献が理論言語学の分野にもたらされてきたことは言うまでもない。この見方に従えば、同一言語における史的变化も、そのパラメータ値の変化に伴う言語タイプの変化として捉えられることとなり、現代語を対象とする共時的研究との間で、統一的な観点から比較・対照研究を行うことが可能となる。

本シンポジウムでは、各講師が依拠している理論体系において言語のタイプを区別する象徴的な言語現象を取り上げ、その現象の有無から現代英語と古・中英語の相違性・類似性について論じることで、英語の史的变化の本質に迫る。また、共時的・通時的研究の両分野における知見が融合した言語理論の構築に向けた可能性を様々な角度から探っていききたい。

焦点卓越言語としての古・中英語と英語史におけるパラメータ変化

三 上 傑

「主語－動詞－目的語」という固定された語順を示す現代英語に比べ、古・中英語はいわゆる動詞第2位現象を示し、語順が比較的自由であったとされる。また、古・中英語で観察されていた豊かな動詞屈折接辞体系は、現代英語では見られることがない。本発表では、Miyagawa (2010) により提案された素性継承のパラメータ化を伴う枠組みの下、これらの史的变化をとらえるを試みる。

具体的には、焦点卓越言語であった古・中英語から主語卓越言語にパラメータ値が変化したのに伴い、豊かな動詞屈折接辞体系と動詞第2位現象が衰退したという可能性を提示し、場所句倒置構文や There 構文等を通時的に分析することを通して、この可能性の妥当性を検討する。

動詞に関わる史的变化と言語タイプ

島田 雅晴

本発表では、動詞に関わる英語の史的变化の中でも、いわゆる動詞第2位現象と助動詞について取り上げる。これらは、本シンポジウムの中で三上講師、山村講師が詳しく議論する現象でもあるが、両講師が提示した知見、説明をさらに推し進め、それらを支持する方向で議論をすすめている。具体的には、動詞第2位現象を三上分析が依存している Miyagawa (2010) の観点から説明する可能性を Saito et al. (1991) による前期古英語の分析を再検討しながら探る。そして、言語を主語卓越型と焦点卓越型に分類する見方で英語の史的变化を説明する可能性を考える。また、助動詞の *do* の使用に関する島田 (2004) の分析が山村分析と整合することを指摘し、言語を拘束形態素依存型と自由形態素依存型に分類する見方で英語の史的变化を分析する試みを検討する。

動詞句省略構文の分布と英語助動詞 *shall/can* の史的発達

山村 崇斗

英語の史的研究において、現代英語の法助動詞は、もともと本動詞の一種として扱われ、前法助動詞と呼ばれてきた。一方で、史的電子コーパスによる調査から、現代英語の動詞句省略と同じ省略現象が、古英語の前法助動詞の補部位置で生じていることが分かっている。動詞句省略が現代英語の助動詞の特異性の指標とされてきたが、この調査結果は、伝統的な「本動詞としての性質を失い、法助動詞として確立した」という史的発達シナリオに対する再検討の余地を示唆している。本発表では、個々の法助動詞の発達の進み具合には違いがあるという Warner (1993) の議論も踏まえ、古英語で既に非定形を持たなかった *shall* と、17世紀まで直接目的語をとっていた *can* の示す統語的振る舞い、特に動詞句省略の分布に注目し、*shall/can* の史的発達、そして省略現象の認可に関わる CP/TP システムの内容について議論する。

研究発表・要旨

第1室(英米文学) 1号館171教室 司会 愛知県立大学准教授 榎本 洋

第1発表

『大いなる遺産』における成功と尊厳の描出

金城学院大学非常勤講師 武藤 美代子

『大いなる遺産』(1860)においてチャールズ・ディケンズ(1812-70)は、主人公ピップを通して人生の成功とは何かを描いている。人は富と社会的地位を手に入れれば成功したと言えるのか、そしてそれによって幸福になれるのか。ピップは様々な人間関係と悲痛な経験により、成功と幸福、そして同時に夢と愛という問題の答えを見出し成長する。そのピップの学習と成長の過程で重要な役割を担うのが、義兄ジョーである。ディケンズはジョーの人物造形に関して、「お人よしで愚鈍な人物」にしたと述べている。従来の批評では、物語の展開上で主要な人物でないジョーを無視するか、逆に、彼の性質から聖なる道化としているかである。本発表ではジョーの言動を検証し、「お人よしで愚鈍な人物」がいかにピップに対し、且つ作品において人間として重要な役割を担っているかを考察したい。

第2発表

ディケンズの『イエスの生涯』を読む：ディケンズの天国獲得のストラテジー

金城学院大学教授 楚輪 松人

ディケンズの死後出版のテキスト、『イエスの生涯』(*The Life of Our Lord*, 執筆1846-49、出版1934)に光を当て、これを手掛かりとして、ディケンズの宗教的信条の中に明確な一定不変の立場が読み取れることを論じる。またディケンズのキリスト教理解について、さらには反ユダヤ主義とその起源についても論じる。

『イエスの生涯』は、子どもたちの知性に合わせて、ディケンズなりに『新約聖書』の4つの「福音書」を要約したものである。『イエスの生涯』の執筆がディケンズ流のキリスト教の「正典」形成のための編纂作業であるとするれば、次の疑問が生じる。(1)なぜその大部分は「ルカ伝」からとられているのか？(2)ディケンズのキリスト教理解には異端の可能性があるのか。(3)「ルカ」中心主義はディケンズの反ユダヤ主義と通底するのか。(4)何がディケンズを反ユダヤ主義に導いたのか？発表ではこれら点を深く掘り下げて行く。

司会 静岡大学教授 鈴木 実佳

第3発表

女主人公の自立：『ジェイン・エア』と『ヴィレット』における逆転の構造

愛知淑徳大学大学院生 若杉 真綾

『ジェイン・エア』(1847)と『ヴィレット』(1853)はシャーロット・ブロンテ(1816-55)の代表的な一人称小説である。一見、主人公ジェインは行動的な女性で、自立を求めているようだが、彼女

の自立のプロットは全て「愛」に向かう。語り手の操作により、女性の社会からの孤立や、結婚による男性との一体化という伝統的な結婚の形を受け入れるプロットとなっている。一方、主人公ルーシーは行動の面で消極的であるにも関わらず、物語のプロットは「自立」へ向かい、語り手は主人公の沈黙を守り尊重するように語る。本発表では『ヴィレット』の主人公と語り手の沈黙の操作が物語を「自立」へ向かわせる理由と、二つの物語が最後に逆転する理由を明らかにしたい。

第2室(英米文学) 1号館172教室

司会 琉球大学教授 石川 隆 士

第1発表

チェンバレンの意味した「悪夢」：ハーンの人生の再評価

名古屋大学大学院生 中井 孝子

B. H. チェンバレン (B. H. Chamberlain) (1850-1935) の死後、1939年に発表された *Things Japanese, 6th Edition* (『日本事物誌 第6版』) には、“Lafcadio Hearn” という新項目が立てられた。3版 (1898) から5版 (1905) まで、ラフカディオ・ハーン (1850-1904) は、“Books on Japan” の項目下の優秀な一人であった。ところが、第6版では、“His life was a succession of dreams which ended in nightmares.” (296) (彼の一生は悪夢で終わりを告げる夢の連続であった。) と書かれた。平川祐弘は河島弘美の説を基に、これを「ハーンに対する怨恨」と捉える。遠田勝は、二人の「絶交」を説く。一方、楠屋重敏は、プライベートな視点を超えているとして、平川の「怨恨」説を否定する。

本発表では、ハーンの死後、魂の友、エリザベス・ビスランド (Elizabeth Bisland) (1861-1929) が、ハーンの手紙集を三冊編集し、チェンバレンと接触した証拠を基に、チェンバレンが「悪夢」と捉えたのは、悪意によるものではなく、彼の捉えたいわば真実であり、哀惜を込めた鎮魂の記述であったことを検証する。

第2発表

東の国の人気者 —— J. M. Synge 作品の、日本上演記録から読み取れること

愛知県立大学准教授 片岡 由美子

世紀末から20世紀初頭という時代、日本において、大正の世に入って間もなくにはアイルランドの文芸復興運動が紹介され、シングの作品もその中であつた。その当時、歌人・片山廣子らによるシング作品の翻訳が発表されているが、『赤毛のアン』の翻訳者、村岡花子が注目された今年、彼女を翻訳の道に導いた片山廣子の存在にも改めて注目が集まっている。日本におけるアイルランド文学の受容は、他の英文学や西欧諸国の文学と共に自然的に起こったわけではなかった。その当時、近代化の只中であつた日本の社会背景に目を転じた際、朝鮮半島における日本の植民地政策抜きにアイルランドに対する日本の視線について語ることはできない。

本発表では、日本におけるシング作の戯曲の上演記録をもとに、彼の作品がどのような形で日本に紹介され、どのように上演されてきたかを検証し、日本におけるアイルランド文化の受容の一面を俯瞰したい。

第3発表

*The Picture of Dorian Gray*における阿片とオリエン

名古屋大学大学院生 CHEN Lu

本発表の目的は、Oscar Wildeの*The Picture of Dorian Gray*を「オリエン」の表象に焦点を合わせながら、オリエンタリズムの視座から分析することである。

Barry Milliganが*Pleasure and Pains: Opium and the Orient in Nineteenth-Century British Culture*で述べているように、本作品が同時代に執筆された、Charles Dickensの*The Mystery of Edwin Drood*やArthur Conan Doyleの“The Man with the Twisted Lip”と同様に、いわゆる阿片文学の伝統に棹さしていることは間違いない。しかし、本作品における阿片窟の詳細な描写は、Milliganが指摘しているような、大英帝国とオリエンの二項対立の脱構築を促すためだけに存在しているのではないのである。本発表は、阿片をはじめとする「オリエン」的要素に着目しつつ、*The Picture of Dorian Gray*における「西」と「東」に関する記号論的分析を実践する。

第3室(英米文学) 1号館173教室

司会 富山大学教授 恒川正巳

第1発表

Talbotの払った代価：物悲しい結末——*A Sea Trilogy*の一考察

愛知学院大学大学院生 高橋公雄

William Goldingの晩年の作品、*Rites of Passage* (1980)、*Close Quarters* (1987)、*Fire Down Below* (1989) は後に合本されて*To the End of the Earth: A Sea Trilogy* (1991) として出版されたが、これは主人公Edmund FitzHenry Talbotの人間の成長をめぐる物語であるといってもよいだろう。

確かに主人公Talbotは人間の成長を遂げる。それは彼の人物評価の変化に、言葉に対する彼の意識の深化にその一端をうかがうことができる。ただ、この三部作をTalbotの一種の「教養小説(ビルドゥングス・ロマン)」と言っても、何も言っていないと同然のように思われるのである。言い換えれば、この作品では主人公Talbotのみに目配りがなされているわけではない。航海の間のTalbotと他の登場人物達との関わりにもっと目を向けなければならないだろう。実際、Talbotが狂言回しであり、個々の登場人物がむしろ主人公なのではないかという思いに誘われることもあるのだ。この研究発表においては、TalbotとPrettiman夫妻との関わりに焦点を絞って、*A Sea Trilogy*に通底するものは何かについて考察したい。

司会 名古屋外国語大学教授 梅垣昌子

第2発表

攪乱する象徴——Saul Bellowの“Looking for Mr. Green”を読む

日本福祉大学准教授 岡崎浩

第二次世界大戦をはさんだアメリカ文学の評価規準の移行は、Russell Reisingにしたがえば、

Vernon Parrington 流の革新主義派の現実観から Lionel Trilling が称揚する反革新主義派の現実観への移行であり、Theodore Dreiser 流の、自然主義と関連が深いリアリズムの時代から Henry James に代表される精神・内面を重視する文学の時代への移行であった。

Saul Bellow の短篇 “Looking for Mr. Green” は、1951 年に雑誌 *Commentary* に発表されたあと、1956 年に *Seize the Day and Other Stories* に、加筆補正が行われたうえで収められ、1968 年には *Mosby's Memoirs and Other Stories* に再収録された作品である。

本発表では、まず、メインプロットおよび Mr. Green のドル紙幣 (greenbacks) としての象徴性に着目して、この短篇の戦後文学としての面に光を当てる。そのうえで、メインプロットの外部に配置されたイメージ・象徴の連関に着目し、戦後文学の価値観を攪乱する可能性を秘めた象徴性の抽出を試みる。

第3発表

「我が心の君」はいずこ：フォークナーのエコロジー、アナクロニズム、そして少女表象

中京大学教授 森 有 礼

ノーベル賞作家フォークナー (William Faulkner) のアナクロニズムは、失われた「南部の大義」を再創造しようとするフォークナーの創作の源泉であり、その不在の起源である。そこから生まれるのは南部の人種・階級及びジェンダー観に基づく南部像であり、それを代表するのがフォークナーの描く他者、殊に女性達 (及び黒人) である。彼等はフォークナー自身の欲望の具現化であり、且つとらえどころのない存在であるために、フォークナーの他者 (= 女性) 表象は、結局のところ常に失敗を運命づけられているとも言える。本論はこうした「表象の失敗」としてのフォークナーの女性像に焦点を絞って、作家の「南部」創出と喪失のレトリックについて議論する。さらにこれを南部のローカル・シーナリーの喪失と関連付けることで、フォークナーの創作の政治的アナクロニズムが、彼のエコロジカルかつロマンティックな南部への眼差しの基盤であることを論証する。

第4室 (英語学) 1号館161教室

司会 静岡大学名誉教授 服 部 義 弘

第1発表

動詞 prevent の V-ing 形を伴う補文の歴史的発達について

豊田工業高等専門学校准教授 中 川 聡

現代英語における動詞 prevent は V-ing 形を伴う3つのタイプの補部を選択する。本発表ではこのうち、DP from V-ing と DP V-ing 補部について通時的観点から考察し、これらの補部が現代英語で観察される統語的特性を持つようになった発達過程について明らかにする。先行研究の調査結果では、これらの補部は16世紀ごろから英語で観察され始めたが、19世紀後半に大きな統語的特性の変化が起こっていることが示されている。この点に関して本発表では次の2点を主張する。1点目は DP from V-ing 補部と DP V-ing 補部はそれらの発達過程で、対格主語を伴う動詞的動名詞の発達に大きな影響を受けたということである。2点目は DP from V-ing 補部において from が前置詞から補文標識へと再分析されている場合がある、ということである。この2つの主張点をふまえて、現代英語で観察される DP from V-ing 補部と DP V-ing 補部の統語的特性に説明を与えることを試みる。

第2発表

ME/i:/ と ME/ɔi/ の融合問題について

中京大学教授 平 郡 秀 信

英語はGVS(大母音推移)の結果、標準英語ではME/a:/ : ME/ai/, ME/ɛ:/ : ME/e/, ME/ɔ:/ : ME/ɔu/, ME/ɛu/ : ME/eu/はそれぞれ単一の母音に融合した。しかし、初期近代英語期の著名な詩人の脚韻の中に、現代英語では不完全韻と思われるME/a:/, /ai/ : ME/ɛ:/, ME/u:/ : ME/ɔu/, ME/i:/ : ME/ɔi/, ME/ɔ:/ : ME/o:/, ME/ɔ:/ : ME/au/, ME/a/ : ME/ɛ/, ME/ɔ/ : ME/u/等が数多く見出されている。これらは現代英語と同様、初期近代英語期でも不完全韻であったのであろうか。それとも何か他の説明が可能なのであろうか。本発表では、ME/i:/ と ME/ɔi/ の融合問題を取り上げる。この問題に何らかの手がかりを与える脚韻は

- a) ME/i:/ : ME/ai/ (flight : weight)
- b) ME/i:/ : ME/ɔi/ (line : loin)

であり、これらの脚韻がどの時期から、どの程度見出されるかが判れば、ME/i:/ の発達過程を辿ることが可能となる。本発表の成果を踏まえると、GVSはどういうふうにも再解釈されることになるか、筆者のGVSに対する見解を開陳し、聴衆の批判を仰ぐことにする。

第5室(英語学) 1号館162教室

司会 中京大学講師 松 元 洋 介

第1発表

後置修飾の過去分詞を含む名詞句の統語構造について

名古屋大学大学院生 チ ゴ チ

本発表では、the jewels stolenのような後置修飾の過去分詞を含む名詞句の統語構造を明らかにする。いくつかの最近の先行研究において、名詞を後置修飾する過去分詞は関係節であるCPとして分析されているが、そこでは先行詞NPがCPの指定部を占め、DがCPと併合されるため、Dの選択特性に違反する。本発表では、いくつかの経験的証拠を提示しながら、名詞を後置修飾する過去分詞がCPではなくAspPであると主張する。そして、素性照合に基づくラベル付けの理論を用いて、後置修飾の過去分詞を含む名詞句の統語構造を示す。具体的には、先行詞NPは関係節であるAspP内に生成された後、繰り上がってAspPと併合され、ラベル未指定の{NP, AspP}が形成される。次に、{NP, AspP}はDと併合されるが、Dに選択されることでそのラベルがNと決定され、最終的に $[_{DP} D [_{NP} NP AspP]]$ という統語構造が形成される。

第2発表

文主語構文と外置構文の派生について

名古屋大学大学院生 近 藤 亮 一

現代英語には、仮主語itとthat節を伴う二種類の外置構文が存在する。一つは、連結動詞とNPまたはAPで構成される述部を持つ構文(*It is obvious that the world is round.*)、もう一つは、述部として連結動詞のみを含む構文であり(*It seems that Ralph already skimmed the milk.*)、前者は文主語構文に言い換え可能であるが(*That the world is round is obvious.*)、後者は不可能である(**That Ralph*

already skimmed the milk seems.) という違いがある。本発表では、*that*節の主要部Cが持つ素性が二種類の外置構文で異なっており、この素性の違いにより文主語構文への言い換えに関する違いが生じると主張する。具体的には、前者の外置構文の埋め込み節のみが名詞的な(φ素性と格素性を完備している)*that*と併合することができ、節全体が主語位置へ移動することを可能にする。さらに、文主語構文と外置構文では*that*節のラベルが異なるとする分析を提案し、この分析が英語以外の言語からの経験的事実により支持されることを示す。

司会 中京大学准教授 中川直志

第3発表

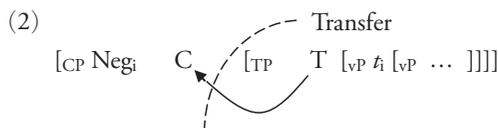
英語における否定倒置構文に対する極小主義的アプローチ

名古屋大学大学院生 小池晃次

(1)に示されるように、文否定要素が文頭へ前置されると、その後ろで主語・助動詞倒置が起きる。この現象は否定倒置として知られ、伝統的にはHaegeman (1995)を中心とした否定基準が1つの主要なアプローチとされてきた。

(1) Never have I seen such a beautiful picture.

本発表では、否定基準の趣旨は保持しつつ、その効果をフェイズに基づく派生モデルから引き出すことを試みる。具体的には、意味部門における情報処理は転送領域単位で進行するため、文否定要素の最高位のコピーとその作用域としてのTPの主要部Tは同じ転送領域内になければならないと主張する。この考えの下では、(2)に示されるように、文否定要素がCP領域へと前置されると、TはCまで移動しなければならず、この移動の結果として倒置語順が生成される。



第4発表

Tough構文に於ける再構築と意味・音韻表示の再統合

名古屋大学博士研究員 前澤大樹

*tough*構文の派生については、近年新たな理論的仮定の下で繰上げ分析が再び試みられてきているが、その大きな動機となっている再構築可能性は十分な説明を得られていない。本発表の主目的は、*tough*構文主語の一部が補文内で生成されるという見解を支持しつつ、再構築の事実を妥当な形で説明する代案を提示することである。

観察される事実は、*tough*構文主語のうちNP補部のみが補文内に由来することを示唆するが、想定されるNPの繰上げは必然的に一般的制約に反する。本発表では、この「繰上げ」は真に統語的なものでなく、位相単位で意味・音韻部門へ転送された表示の断片を再統合する操作の結果として生じると主張する。即ち、当該NPは空演算子の補部として補文内で基底生成されるが、音韻部門では常に、意味部門では随意的に、本来と異なり主語Dの補部として再統合される。

この分析はまた、他の空演算子構文にも容易に拡張でき、幾つかの望ましい結果が得られる。

第1発表

日英比較による使役動詞Haveの意味解釈に関する一考察

信州大学大学院生 藤原 隆 史

英語の使役動詞には、make, have, let, get などがあると英語教育で教えられるが、これらの中でも have は、その後続する要素が〈have + 目的語 + 原形不定詞 / 現在分詞 / 過去分詞〉と多様である上に、それぞれが様々な意味解釈を持つ。安藤(2005)は、上記の形式に「使役」「許容」「受け身」「被害」「結果」など多くの意味内容を認めている。本発表では、その中でも〈have + 目的語 + 過去分詞〉に注目してみたい。例えば、I had my hair cut by Mary. (Washio (1991)) という文では、2つの意味解釈があるとされる。すなわち、「(主語が依頼して) メアリーに髪の毛を切ってもらった」という使役の読みと「(主語の意図とは関係なく) メアリーに髪の毛を切られた」という被害の読みの2つである。

本発表では、英語では1つの言語形式で示された文が、日本語訳において2通りの意味解釈を許容するのはなぜか、また、英語と日本語に共通して「使役」と「被害」読みを弁別する言語的装置があるのか等について考察を行う。

第2発表

No more A than B の認知意味論——クジラ構文の意味と認知

金沢大学大学院生 廣田 篤

本発表は、所謂クジラ構文をとりあげ、そこにどのような認知が反映しているかを明らかにすることを目的とする。論点は、認知言語学でいうカテゴリー化という認知プロセスがこの構文の意味に、実は深く関わっているということである。

クジラ構文とは、以下のような文を代表とする構文のことである。

(1) A whale is no more a fish than a horse is. (ウマが魚類ではないように、クジラは魚類ではない。)

本発表では以下の点を主張する。(1)の事態を表す際、「クジラは魚類でない」というときと「ウマは魚類でない」というときでは話し手のカテゴリー化の仕方(i.e. 認知プロセス)が全く異なっていること。そして、その違いが構文の意味の側面にある意図として反映されて、話し手は聞き手に対して結果的にその誤信念を修正するよう働きかけているということである。

第3発表

付加疑問文の極性について——問主観性と認知文法の視点から

金沢大学大学院生 中谷 博 美

付加疑問文は、主文と極性を逆転させるものとさせないものがある。両者には、機能的な違いはなく、意味の違いもあいまいである。先行研究では、逆極性の場合には話し手の見解、同極性の場合には話し手以外の人の見解を示しているものととらえられている。しかし、It's snowing, is it? (Wells 2006) では、話し手、聞き手どちらの態度表明とも解釈できる。

本発表では、付加疑問文の意図を問主観性に基づく対話者間の共通基盤(Tomasello 2008)および共同注意(本多 2011)の視点からとらえ、認知文法の interactive grounding と epistemic control cycle (Langacker 2009) を用いて文構造を考察する。付加疑問文は、話し手が、対話者間の共通基盤における差異を感じ、聞き手にそれを認識させることで、問主観的認識調整・共有を意図してい

るという推論を導いているものであるとし、極性の違いはepistemic statusの差であり、逆極性では共同注意による認識調整を同極性では共通認識による感情の共有を意図すると主張する。

第7室(英語学) 1号館164教室 司会 南山大学短期大学部准教授 石崎保明

第1発表

英語と日本語における被動作主焦点化の認知プロセスについて

金沢大学大学院生 高島 彬

本発表の目的は、中村(2001)の提唱する「認知相対論」の観点から英語の難易中間構文と日本語のガ格テアル構文を対照分析し、それぞれの構文に反映される認知構図を図式化することである。議論の流れとして、まずヴォイス・システムに関する文法的特徴から両構文がともに動作主を言語化の範囲から外し被動作主を焦点化する共通の認知構図を反映していることを主張する。次に、共通のヴォイス・システムを共有する両構文だが、それぞれの構文の持つ意味に違いが生じる要因について、出来事を概念化する際の認知主体の視座(vantage point)の違いがその要因として挙げられることを述べる。具体的には、英語の難易中間構文では認知主体は被動作主の属性を経験する経験者(experiencer)としての視座から出来事を概念化しているのに対して、日本語のガ格テアル構文では、認知主体は結果状態を知覚する知覚者としての視座から出来事を概念化しているという差異があることを述べる。

第2発表

認知言語学におけるプロフィール(profile)の概念に関する一考察

——指示代名詞thisとthatを例にして

金沢大学大学院生 小林 隆

認知文法では、言語表現の意味は概念化に基づき、文法とは意味と形式が表裏一体的に結びついたシンボリックな関係を成したものであるとされる。概念化とはつまり人間の基本的認知能力に基づいた対象の捉え方のことであり、我々が様々な表現を用いて対象について相手に伝えることができるのは、言語表現の意味が本質的に主体の主観的解釈を反映するためだと考える。概念化の主体が最も注目している部分をprofile、意味を解釈する上で基盤となる認知的領域をbaseと呼ぶ。例えば「斜辺」の意味は、直角三角形というbase上のprofileとして規定することができる。言語表現の記述に際し、Langacker(2008)では、概念化の対象のみがprofileされるとし、Verhagen(2007)は、概念化の主体と対象の両方がprofileされるとしている。本発表では、指示代名詞thisとthatを例に挙げ、認知言語学の基本的概念であるprofileについてLangacker(2008)の議論を支持しながら、Verhagen(2007)の観点を取り入れた認知プロセスの記述を目的とする。

第3発表

英語と日本語の語りをグラウンディングの観点から考える

金沢大学大学院生 向 井 理 恵

あるスピーチ学のテキストに次のような一節がある。

“You should keep practicing this fable until you are able to create the illusion that you are telling it effortlessly and with total spontaneity.” これは、「真の芸術家とは何か」を述べた文章の一部で、既に述べられている主張を念押ししている箇所であるが、“you are telling”の“are”に強勢を置いて語ると、語り手の主張が明確に伝わる。areのような機能語に強勢が置かれる感覚は、日本人にはピンとこないように思われる。これは、英語の節のグラウンディングの関心事が「出来事が起こったか否か」を聞き手に伝えることであり、それを表す中心である existential verb (Langacker 2009) が言語化されるのに対し、日本語では英語のグラウンディング要素のような、聞き手に向けられる表現が言語化・体系化されていないということが背後にあるためと考える。本発表では、このような英語と日本語の語りにおける感覚の違いをいくつか挙げ、それを認知文法のグラウンディングの観点から考察し説明を与える。

第4発表

道具・手段のデに対応する英語表現

信州大学教授 加 藤 鉦 三
信州大学准教授 Sean Mehmet

「電車で行く」「鍵で開ける」「電子レンジで温める」等の表現は、英語ではそれぞれ go by train, open with a key, heat in the microwave のような言い方になる。この事例だけでも十分分かるように、道具・手段を言う時、日本語ではデを使えばよいが、それを英語にする時には、どのような前置詞を選択するかを考えなければならない。最初の一般化としては、[抽象化された手段だと by]、[手で扱う道具だと with]、[そうでない道具だと 場所表現] という区別のしかたが考えられる。By についてはそれで差し支えないが、with に関しては、(1) 電話は手で扱う道具であるが、talk with a phone と言えないのはなぜか、(2) カードは道具であるとは言い難いが、それでも pay with a credit card と言えるのはなぜか、というような問題がある。電話については、talk over the phone では on に置き換えられるが、send data over the phone では over を on に置き換えることは難しい。本発表ではそのような事例を分析し、解決法を追及する。

大会関係役員一覧

支部長	松本三枝子（愛知県立大学）
副支部長	鈴木達也（南山大学）
支部選出評議員	内田恵（静岡大学）
支部代表理事	松本三枝子（愛知県立大学）
事務局長	滝川睦（名古屋大学）
事務局長補佐	田中智之（名古屋大学）
書記	石崎保明（南山大学短期大学部）
監事	大室剛志（名古屋大学）

大会準備委員（◎委員長 ○副委員長）

英文学

○楚輪松人（金城学院大学）

◎山本卓（金沢大学）

米文学

和泉邦子（金沢大学）

川村亜樹（愛知大学）

永瀬美智子（愛知大学）

森有礼（中京大学）

英語学

大村光弘（静岡大学）

中村太一（福井大学）

吉田江依子（名古屋工業大学）

開催校大会準備委員

中川直志

森有礼